

## 私のおすすめ本

飯星博邦 教授

(統計学)

### 『「家族の幸せ」の経済学：データ分析でわかった結婚、出産、子育ての真実』

山口慎太郎著

光文社 2019年

私が経済学部で勉強していた30年以上前には、経済学が会社の仕事には役立っても「家族の幸せ」とは何ら関係ないと思っていた。しかし、それから長い時間が流れて個人のビッグデータが蓄積されて、人間の私的な生活の営みさえも、コンピュータの力を借りて経済学と統計学でいろいろなことが分かってきた。たとえば、「赤ちゃんの出生体重は、その後の人生と大きく関わっている。赤ちゃんの出生体重が重いと、大人になってからも健康であることが多いだけでなく、知能指数や所得も高くなる傾向がある。」え?! そうなの。しかし、今ではアメリカの計量経済学の教科書にも掲載されている有名な話です。また、別な章によれば、今やカップルの2割がマッチングサイトで出会っていて、さらには、年収が1000万円と自己申告する人の数は実際の人数の4倍にもあがるそうです。本当に、これ全部、経済学者の研究成果なの!? と耳を疑いたくなる話ですが、本当の話です。経済学は大きく変わったのです。ネットにある文書のデータやGPSの地図情報まで、入手可能なデータはすべて使って、人間の行動を私的、公的の如何を問わず、データから何がわかるのか、地道に研究する科学が「新しい経済学」なのです。仕事に関係しない「家族の幸せ」についてのデータからの発見を、「数式なし!」で教えてくれる一冊です。この本の最後の章は「離婚の経済学」、人生の苦い部分も経済学者にとっては、おいしい研究対象なのです。人生の教訓は、全部、データが教えてくれます。

### 『使える! 経済学: データ駆動社会で始まった大改革』 日本経済研究センター編

日本経済新聞社 2022年

次の一冊は、タイトルにあるように「使える! 経済学」です。経済学は家庭生活だけでなく仕事にも有用になったのです。私が22歳でサラリーマン生活を始めた時(同じく30年前

の話)、その会社の人事課長は経済学部出身だったらしく、入社式の日、「経済学は役立たない。」とおっしゃっていました。「はあ、そうゆうものか」と暗澹たる気持ちで社会人生活が始まった。この本のタイトルは全く正反対、経済学をポジティブにとらえています。21世紀、「令和」の時代は「昭和」とは違うのです。データがあるところ、たちどころに難問奇問を解いてしまう。たとえば、フリマのマッチングやネットでのマーケティング、新商品の需要想定など。この本は8章ありますが、各章に日本人の世界的若手経済学者がわかりやすく、「データ駆動型社会」に対してどのように経済学を使うか説明してくれています。その1章に、ネットやマスメディアで一世を風靡しているイエール大学助教授の成田悠輔さんも寄稿しています。内容は「DX」と書いて「**デジタル・トランスフォーメーション**」から「**データ・トランスフォーメーション**」への移行だそうです。

### 『物価とは何か』 渡辺努著

講談社 2022年

最後の一冊は、インフレ問題です。これも専門書としては異例のヒットだそうで、皆さんやはり物価上昇には、かなり悩んでおられるのですね。この本の内容もビッグデータを使った分析内容を紹介しています。そもそも、ビッグデータの皮切りは、コンビニのレジで入力されたPOSデータが端緒らしい。POSデータというのは、レジの人が、売れた商品の情報と一緒に購入したお客さんの性別、見た目の年齢、購入した時間帯を入れた情報のことで、この情報を使ったコンビニ・チェーンが情報戦を勝ち抜いて全国展開していきました。私の子供のころにはコンビニはまだなかった。このような全国のどこで、どの商品がいくらで売られているという細かなPOS情報があるから、今のインフレの状況が正確にわかる。これを「ナウキャスト」いう。著者の渡辺努先生は、日本銀行出身で今は東京大学経済学部の学部長をされています。また、株式会社のナウキャストの役員でもあります。POSデータから、「東大指数」という物価を測る指数も開発されたそうです。商売上手。

### 筆者自己紹介

飯星 博邦 (いいぼし ひろくに)

1964年東京都生まれ。87年早稲田大学政治経済学部卒、東京電力(株)勤務後、2003年大阪大学博士後期課程中退。博士(経済学)。22年日本大学経済学部着任。